モンスターハンター　奇妙な力宿りしハンター

カンタロス希少種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モンスターハンター　奇妙な力宿りしハンター

【Ｎコード】
Ｎ１５５３Ｙ

【作者名】
カンタロス希少種

【あらすじ】
雪山のふもとにある小さな集落、ポッケ村。そこでハンターとして生活している青年・ギル＝ヴァレリオンは軽いノリでフルフル討伐に向かった。だが、トラブルにより偶然持っていた閃光玉が破裂。光が消え、彼の視野に入ったものは、少女になっていたフルフルだった・・・。

完全な作者の趣味です・・・。強引な設定で、擬人化がメインです。苦手な方は戻るを押してください。不定期更新ですが、なるべく早めに更新します。

第1話　謎の力、発動（前書き）

はじめまして！カンタロス希少種という者（虫）です！

小説を書くのはこれが初めてで、多少のミスはありますでしょうが、その時はスルーして頂ければありがたいです。どうか皆さん、暖かく見守っていてください！

楽しんで頂ければ何よりです。

それではどうぞ！

第1話　謎の力、発動

雪山。雪で白く彩られたその美しい姿は、訪れる者を圧巻させる。ふもとには広大な湖があり、生態系も豊かである。

しかし、その裏には弱肉強食の世界が広がっており、モンスターと呼ばれる凶暴な生物がひしめいている。これは雪山だけに限った事ではない。時に人間を襲い、村を壊滅させることも決して珍しい事ではない。

そのモンスターを狩猟するのを仕事とする者たちを、ハンターと呼ぶ。

雪山の片隅にポッケ村という小さな集落がある。

そこに住む青年、ギル＝ヴァレリオンもまた、ハンターのひとりである。彼はハンターランクがまだ2の、ギルド的にはあまり大した事のないハンターだ。　だが、ただハンターランクが低いだけであり、その腕はかなりのもの。巷でも少し有名で、彼宛の依頼もよく村に届く。つまり、なかなかのハンターなのだ。

「・・あれ？アルビノエキス無かったっけ？しゃーねぇ、取りに行くか。」

「あ、ギルさん。おはようございます。また狩りですか？」

「あぁ、おはよ。ちょっとフルフルをね。」

「

そうですか。じゃあ気をつけて。」

「へいへ～い。」

村人の信頼も厚く、何より彼が陽気な性格なので接しやすいようだ。

「おはようさん、村長。」

「おお、ギルかい。珍しいね、こんなに早くから。」

「たまにはな。フルフルあるか？」

「あ

あ、あるよ。受注するのかい？」

「頼

む。」

「・

・はいよ、終わったよ。あんたほどのハンターなら大丈夫だろうけど、油断すんじゃないよ。」

「分かってるって。そんじゃ行くか！（スゥーー・・）行くぞラジいいいいい！！」

「はっ・・はいニャアアアア！！」

ラジと大声で呼ぶと、ギルの足元から黒毛の

アイルーが飛び出してきた。

「ひどいニャご主人・・・。まだ朝の7時だニャ・・・。」

「そこは『もう7時』だろ？気にすんな！行くぞ！」

「朝から元気ですニャ・・・。」

そして1人と1匹は、フィールドとなる雪山へ向かった。

「・・おっ、いたいた・・。」

雪山のエリア1、フルフルは簡単に発見できた。

「それじゃ、さっそく行くとするか・・・！」

「分かったニャ！」

ギルは愛刀・飛竜刀【朱】を引き抜き、フルフル目掛けて走る。・・が。

ルッ。

「ぶべらッ！！」

コケた。

その時、

「いって・・ん？」

アァッ！！

ッ

カ

「うおぉっ！！何で閃光玉がッ！？」

コケた衝撃により、閃光玉が炸裂してしまった。相手はフルフル。閃光玉は効かない。

「クソッ・・このままじゃ・・！」

視力が奪われ、焦るギル。しかし、いつまで経ってもフルフルがこっちに来る気配は無い。ようやく、少し目が見えるようになってきた。

「よし！なんで来なかったのか知らんがこっちにゃ好都合だ！いく・・・ぜ・・・・・」

ギルは止まった。その後、ものすごい量の冷や汗が垂れてきた。それはラジも一緒のようだ。

『あ・・あ・・・。』

長い白の髪の少女が、震えながらこちらを涙目で見ていた。

裸で。

「・・・。」

とりあえず、ギルは飛竜刀【朱】を納刀し、少女に近づいた。

しかし、

「こ・・来ないで・・・。」

ギルに怯え、逃げるように後ずさる。だが、ギルは少しためらうも、歩みを止めなかった。そして、少女の目の前で止まった。少女は恐怖のためであろう、目を瞑る。

side ”unknown girl”

ふもとにいると、何かが走ってくるような音がした。何処に何がいるのか探そうとした時、本当は真っ暗な筈の視野が真っ白になった。
気がついたら、私は足元の草を見ていた。初めて辺りを見回すと、いろんな物が見えた。見える事の楽しさを、私は初めて知った。
・・けど、また足音が聞こえた。そっちを見ると、黒い鎧を着て、赤い剣を持った男の人がこっちを見ていた。私は怖くなって、逃げようとした。でも、怖くて足が動いてくれない。男の人は剣をしまって、こっちへ歩いてきた。後ずさっても、差がどんどん縮まっていく。男の人が目の前で止まる。私は殺される・・そう思って、目を瞑った。けど・・

ぱさ。

痛みがくると思っていたけど、暖かい布が肩にかかった。

目を開けると、歩いてきた男の人が目をそらしながら上着をかけてくれていた。

「・・とりあえず、それ着てくれ。目のやり場に困る・・・。」

彼の言葉を聞き、私は身体を見た。・・私、裸・・！？

慌てて彼がくれた上着を着た。彼は苦笑して、私の頭を撫でてくれた。

「・・ごめんな。怖がらせちまって。大丈夫だ。俺たちは何もしない。」

彼にそう言われたとき、胸が熱くなって、心臓が高鳴った。何故か、見えるようになった私の目には、もう彼しか映っていなかった。

「元々はご主人が悪いニャ。何で閃光玉なんか持ってるニャ？」

「・・出し忘れてた。」

「やっぱりニャ！」

「るせぃ！コケるなんて思ってなかったんだよ！」

「ご主人はハンターニャ！雪が滑ることくらい分かる筈ニャ！」

「俺だって人間だぁ！コケる時はコケるんだよ！」

彼と猫みたいな生き物との言い争いを見てると、自然に笑顔になれた。それに気づいたのか、彼がこっちを見た。

「お、やっと笑ったな。」

その一言、そして彼の笑顔で、再び胸が鳴る。

「自己紹介がまだだったな。俺はギル＝ヴァレリオン。ギルってよく呼ばれるな。で、こっちがアイルーのラジ。うるさいけど頼りにはなる。んで、君の名前は？」

「私の・・・名前・・・？」

よく考えると、私には名前なんて無い。どう答えたらいいのか分からずオロオロしていると、

「もしかして名前・・無いのか？」

「・・うん・・・。」

彼・・ギルから言ってきた。名前が無いのが急に寂しくなり、俯いてしまった。

「そうか・・悪い事聞いちまったな・・・。なら『ミナ』ってのはどうだ？」

「・・え？」

「あ・・ダメなら他のでもい「・・可愛い・・・。」・・じゃあそうするか。」

嬉しかった。

初めてもらった名前。可愛いから、というのもあるけど、ギルが決めてくれたから、と言うのが正しい。

「名前も決まったし、こんなんじゃクエストクリアできんな。リタイアするしかないか・・・。ラジ、リタイアの印ののろしあげてくれ。

」

「了解ニャ。」

私はギルの住む村に戻るまで、ずっと彼の手に抱きついていた。こうしていると、なんだか落ち着ける。

もしかして、私は彼に言葉をかけられた時・・

彼を好きになってしまったんだろうか・・？

side out

結局、クエストの目標であるフルフルがミナになってしまったため、クエストはほぼ強制リタイア。まあ、仕方ないが・・。

村長にわけを話し、ミナは俺の家に住むことになった。村人たちもミナを受け入れてくれている。いい人たちだ。

というか、さっきからずっとミナが俺の左腕を抱いたまま放そうとしてくれない。心なしか顔が赤かったが、裸だったし風邪でもひいたのかね？

服は俺の使い古しのランポスシリーズを服用に加工したもの。結構似合ってたな。

それにしても、何で急に擬人化なんかしたんだ？今までは普通に目を回したり、何も起こらなかったり・・今後、こんな事が無いよう願いたいが・・。

続いてしまう・・のか？

第1話　謎の力、発動（後書き）

ここでちょっとギルとミナの説明を。

ギル＝ヴァレリオン
１８歳
１８３ｃｍ

ポッケ村に住むそこそこ腕の立つハンター。
陽気な性格で、誰からも好かれる。
両親は幼いころに死亡。どんな顔、人だったかも覚えていない。
防具はオウビートシリーズ。本人曰く「カッコいいから」のこと。
武器は飛竜刀【朱】。かなり使いこんでいる。

ミナ
１４歳くらい
１６７ｃｍ
元はフルフルだったが、ギルの誤爆した閃光玉の光に呑まれ、人間の姿に
なった。大人しいが、ギルに限っては甘えたがりになる。
瞳は赤で、目は少し大きめ。外見からでも優しそうな整った顔。
髪は真っ白で、腰くらいまで伸びている。
目は一応見えるが、視力はそんなに良くない。

あと、ミナのネーミングは大剣のフル「ミナ」ントソードから。
回りくどくてすみません・・。

こんな駄文をここまで読んでくれた方、
本当にありがとうございます！

それでは、また2話で！

第2話　告白（前書き）

めっっっっさ時間かかりました・・。てなわけでどうも！カン希です！
短い！これでもかというほど短い！！ｗｗ
展開があまりにも早すぎますが、勘弁してください・・。
なお、駄文です！それではどうぞ！

第2話　告白

村に帰って、約1時間。ここはギルの家のリビング。そこにあるソファにギルとミナがテーブルを挟んで座っていた。

「色々とゴメンな、さっきは。大丈夫か？どっか痛いとかないか？」

「うん、大丈夫だよ。あと謝らなくてもいいよ。おかげでギルとこうして一緒にいられるし・・／／／」

「うん？最後らへん聞こえなかったんだが？」

「い、いや何でもないよ！／／／」

赤面し、顔の前で両手を振る。この仕草で大抵の人は萌え殺せるだろうが、そういうのに恐ろしく鈍感なギルには可愛いな～くらいしか思っていない。

「？そうか。そんで、オババ様に言わなくちゃなんないからな。色々聞くけど構わないか？」

「わかった。いいよ。」

「ああ。ありがとな。じゃあ一個目。ミナはフルフル・・だったんだよな？」

「うん。ギルと会う前までは確かにフルフルだったよ。」

「ほほう。では次。何で人の言葉が分かるんだ？」

「え？えっと・・あれ？」

「・・どうした？もしかして分からないのか？」

「うん・・。」

「そっか。ま、仕方ないな。」

「・・ごめんね・・。」

「なーに、しゃーねーよ。無理もないな。いきなりなんだから。もともとミナは頭が良かったんだろうな。」

「ッ！？／／／」

急にこんなことを言われ、顔を真っ赤にする。

「・・ん？どうかしたか？顔が赤いが・・。」

「い、いやいや！何でもない！」

「なら良いが。じゃ次な。何でその姿になったか分かるか？」

「ん・・ごめん・・それもわかんない・・。」

「んー。普通はそうだよな。本来この質問は俺が答えるべきだしな。じゃ、最後だ。・・ミナ、お前は俺を・・恨んでるか？」

「・・え・・どういう・・こと・・？」

いきなりの衝撃的な質問に沈黙が流れる。それを破り、ギルが話し始めた。

「・・俺は今までお前の仲間を何匹も殺してきた。いくらそれが仕事っつったって、やっぱり不本意だ。しかもお前を人間の姿にしちまった。恨むべき存在の人間に・・。」

「・・・・。」

「実はずっと気になってた。・・やっぱ、恨むよな・・。そんくらいの事を俺は「そんなことない！」・・ッ！？」

ずっと黙っていたミナが、突然そう叫ぶように言った。いきなりのミナの返答にたじろぐ。

「私が・・ギルを恨む？そんな訳ない・・！どんな理由があってもそんな事思わない！さっきギルに会った時、確かに分かった！ギルはいい人だって！それに・・私は決めたの！何があっても・・私を受け入れてくれた・・大切で大好きなギルに付いていこうって！！」

大粒の涙をこぼしながら訴えるミナ。ギルはその姿に驚き、すぐにこう返した。

「・・そんなふうに思ってくれてたのか・・。ごめん、ミナ。そんで・・ありがとう。」

「・・うん・・。」

しゃくり上げながらも笑顔を見せる。いつも以上の優しい顔で。

「・・じゃあ、オババ様のトコまで行ってくる。ちょっと待っててくれ。」

「うん。行ってらっしゃい。」

「ああ、行ってきます。」

そう言い、家を出る。そしてしばらく空を仰いだ。

「何年ぶりだろうな・・誰かに心底大切に思われたのは・・。」

最後にそう呟き、ギルは歩きだした。空は雲ひとつ無い何処までも晴れ渡る青空だった。

～side・『Mina』～

「・・うぅ～・・。思わず『大好き』なんて言っちゃったよぉ～・・。」

自分が言った事の重大さに今更気づき、赤い顔を手で覆い隠す。だが、その口元は緩んでいた。

「・・人間になれたから、今こうしてギルといられるんだよね・・。なら、むしろこっちの方が幸せだったのかも。・・こちらこそ、ありがとう。ギル・・。」

微笑みながら、窓の外を見る。そこには、窓越しでも眩しい光を放つ太陽が輝いていた。

～side　out～

第2話　告白（後書き）

・・急ですよねぇ・・。
どうだったでしょうか？2話目で告白・・早ぇえｗｗ
感想、お待ちしてます！
それでは3話でお会いしましょう！
メリークリスマス＆よいお年を！！

第3話　脅威　　1（前書き）

はいどうも！受験なんて何処吹く風ぇ！！カン希でっす！
今回はちょっとシリアスかな？ッ分からん！俺にはわからん！！
ま、そんなこんなで楽しんでいただけたら何よりです。擬人化増えます！
それではどうぞ！

第3話　脅威　1

「・・ただいまー・・。」

「ｚｚｚ・・・・ん・・あ、ギル・・。おかえり・・。ふあぁ・・・ちょっと遅かったね。お昼寝しちゃった・・。・・あれ、どうしたの？なんだかすっごく疲れてるみたいだけど・・。」

小さく欠伸をしながら、首をかしげてうな垂れているギルを見る。

「起こしちまったか・・。あー・・ちょっとな・・。オババ様に『女性について』って2時間半近く説明されてな・・。寒いわ疲れるわでもうグッタリだ・・。」

「お・・お疲れさま。お茶いれようか？」

「頼む・・。・・ん？何処にあるかわかるのか？」

「うん。ギルが出てからすぐにラジに教えてもらったんだ。」

「そうか・・。ともかく頼んだ。玄米茶で。」

「わかった。ちょっと待ってて。」

そう残し、ミナはラジにもらったのか髪留めで髪をくくり、トテトテとキッチンの方へ歩いていった。

「・・にしても何なんだろうな・・。いきなりモンスターが人間になるとは・・。今までこんなことはなかったんだが・・。」

ようやく落ち着いたギルが、ソファに深く腰掛け、天井を見た。

・・ちっと、今までの事を整理してみるか。

今までそこそこ長い間ハンターとして食ってきたが、それまで閃光玉は幾度となく使ってきた。
親父とお袋が死んでから、俺はいきなり独りになってしまった。でも、俺は前からなろうとしていた
ハンターになるチャンスだ、と前向きに考えようとしてた。ま、簡単なことじゃなかったがね・・。
ハンターになりたての１０歳の頃から、閃光玉は駆け出しの俺にとっちゃ命を守る無くてはならない物
だった。現に、閃光玉があったから今もこうして生きてるって訳だ。
だが、今まで閃光玉は普通に機能してた。投げたら破裂して、光が出る・・だったはずなんだが。

いきなり人間になった。それも、細部まで精密な・・いや、ミナの身体全部を見てたんじゃないぞ。
あくまでパッと見、だ。それでもモンスターのフルフルの特徴は全くなかった。目も見えてるし。

・・何で急に？

それが一番の謎だ。もしかして、これからもこんな事が起こってしまうのか・・？

ギルが物思いにふけてふと顔を戻すと、お茶が入った湯のみを盆

に乗せて持っているミナが、
先ほどと同じように首をかしげて立っていた。
「はい、お茶。どうしたの？何か考えてたの？」
茶をギルの前に置いて、盆を抱えてミナも向かいのソファに座った。
「んー・・いや、なんでもない。」
ぶっきらぼうにそう答えると、とりあえず置かれた香ばしい香りを立てる玄米茶を少しすすった。
「あのさ、ミナ。俺ちょっとこれからクエスト行ってきてもいいか？」
「え？うん・いいよ。」
「・・あ、そう。」
予想外のミナの返答に、間抜けた声を出す。
「ホントはギルといたいけど・・ギルがしたいのなら、私には止める理由がないからね。」
「ありがと。じゃ、行って来る。すぐ帰ると思うから。」
「行ってらっしゃい。無理しちゃ駄目だよ？」
「分かってら。じゃな。」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

・渓流・

クエストを適当に選び、決めたのは渓流でのドスジャギィ２頭の討伐。狩猟環境がやや不安定だったが、
ギルはどうせ何も出ないだろうと大して気に留めなかった。現在、ギルは最初の１頭を仕留めたばかり。
腹に刺した飛竜刀【朱】を引き抜くところだった。

「ふぃ・・まず１頭。あと１頭か。」

５分後。

「・・ん、いたいた・・。」

岩に隠れた彼の視線の先には、滝の近くで水を飲んでいるドスジャギィがいた。他にモンスターはいない。

「休憩中のトコ悪ィが、仕留めさせてもらう！」

岩陰から素早く飛び出し、回転しながら飛竜刀を一閃。刀を戻した瞬間、
腹から血が吹き出し、ドスジャギィの上半身と下半身が離れた。

「悪いな・・これが仕事なんだ。さって、帰るか・・。」

ギルがドスジャギィからエリマキを剥ぎ取り、帰路につこうとした時だった。

『グォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！』

すぐ近くに、常人なら聞いただけで気絶してしまいそうな凶悪な鳴き声が聞こえた。

「なっ・・！？まさか乱入・・か！？」

ギルは思い出した。このクエストは狩猟環境が不安定だったことを。

「まさ・・か・・アイツか・・！？」

そう呟いた時、川の向こう岸に巨大な影が見えた。その時、ギルは確信した。

恐暴竜・イビルジョー。

今まで何回か戦った事もあるが、あくまでそれはイビルジョー討伐クエスト。
こうして乱入で現れたのはこれが初めてだった。
だが、ギルは決して逃げようとはせず、逆に刀を構えた。

「この際やってやろうじゃねえか・・。負ける訳にはいかない！」

そう大きめの声で言い、イビルジョーに向かって走っていく。

「オラァァ！」

比較的柔らかい腹を切る。イビルジョーはそれに一瞬ひるむが、そのまま体当たりを仕掛ける。

それを回避したギルは、再び切りかかる。今度は脳天向けて刀を振りかざすが、思った以上に硬く、弾かれてしまった。その隙をつかれ、がら空きになった腹にその石頭を思い切りぶつけられた。

「・・がはっ・・！」

3メートルほ吹き飛ばされたギルは、腹に走る激痛に顔を歪ませながらもヨロヨロと立った。イビルジョーは敵を仕留めようと、こちらに走ってきている。

「・・ま・・まだだ・・！俺には・・今の俺には・・生きなきゃいけない理由があるんだぁっ！！」

ギルの威圧に負けたのか、イビルジョーが足を止める。その一瞬を見逃さず、ギルはとっさにアイテムポーチに手を入れ、取り出した閃光玉を地面に投げつけた。そこからまばゆい光が放たれる。

「今・・は・・生きるのが・・先だ・・。なん・・とか・・村・・に・・・。」

腹を押さえながら、力なく歩くギル。だが、3歩ほど歩くと激痛がさらに増し、吐血した。

「ガハァッ・・・！！ちく・・しょ・・う・・・。」

ぼんやりする頭で、ギルは少し疑問を抱えた。いつまでたってもイビルジョーが来ない。

そう思った時だった。

「・・・・あ・・・あ・・・。」

イビルジョーがいたところに、深緑の髪の少女が涙目でギルを見ていた。

第3話　脅威　　1（後書き）

・・イビルジョーこわい・・。
初めて乱入したときめっさビビりました・・ｗｗ
イビル娘は2で詳しく、という予定です。

では、感想、擬人化希望など、お待ちしております！
また次話でお会いしましょう！それでは失礼！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1553y/

モンスターハンター　奇妙な力宿りしハンター

2012年1月6日14時48分発行